

# 大学生の恋愛行動の進展

高坂康雅 *KOSAKA Yasumasa*

- 1 — 問題と目的
- 2 — 方法
- 3 — 結果と考察
- 4 — 結果のまとめ

【要旨】松井 (1990, 2000) や飛田 (1991) は、青年期の恋愛行動の分類を行い、恋愛行動の進展プロセスについて明らかにしているが、どの程度の交際期間でそれらが進展するのかについては明らかにしていない。そこで、本研究では、交際期間に伴う大学生の恋愛行動の進展を明らかにすることを目的とした。全3回の縦断調査において、同一の恋人と交際していた大学生126名(男子38名、女子88名)を対象に、各調査時点における恋愛行動の経験の有無を尋ねた。その結果、松井 (1990, 2000) の第4段階に位置づけられるような行動も、交際8ヶ月程度までには多くの大学生が経験しており、その後、親密さを示す行動や親密になる過程で生じる葛藤行動が徐々に増えるが、結婚に関わる行動は、ほとんど経験されないことが明らかになった。

## 1 — 問題と目的

青年期に入ると、異性や恋愛に対する興味・関心、憧れが高まり、異性と親密な関係(恋愛関係)になることを望むようになり、そのなかで、実際に異性と親密な関係を築く者も徐々に現れてくる。

恋愛関係において、カップルは、一緒に買い物をしたり、日常的な会話のような、友人関係でもみられる行動を2人だけで行ったり、キスやセックス(性行為)のような性的行動を行うようになる。さらに親密になると、婚約・結婚に向けた話し合いや親への紹介のような行動をするようになる。このような恋愛関係にあるカップルが行う行動は、恋愛行動と呼ばれ、これまで恋愛行動の分類や、恋愛行動の進展の検討が行われてきている。松井(1998)は、社会心理学における恋愛研究には、「恋愛に対する態度や認知」、「異性選択と社会的交換」、「恋愛感情と意識」、「恋愛の進行と崩壊」という4分野があることを指摘しており、恋愛行動の分類や、その進展は、「恋愛の進行と崩壊」に該当する。

Swenson (1972) は、1200 名を対象に調査を実施し、400 種類の活動の中から、恋愛関係に特有の行動として、①愛情の言語的表現、②自己開示、③非物質的な形で愛情を示すこと、④言語的に表現されない感情、⑤愛情を物質的に示すこと、⑥愛の身体的表現、⑦相手のよくないところを大目に見ようと思うこと、の7つの領域を見出している。

また、飛田 (1991) は、大学生の恋愛行動を、①友愛的会話（「家族の話をした」など）、②自己開示とつながりを求める行動（「寂しいときに話をした」など）、③タイプ I デート行動（「2人でドライブをした」など）、④タイプ II デート行動（「2人でお酒を飲みに行った」など）、⑤宿泊・性行動（「相手の部屋に泊まった」など）、⑥両親との関係（「親から子どもの頃の話聞いた」など）、⑦求婚行動（「求婚された」など）、という7カテゴリーに分類し、恋愛行動が①から⑦に向けて進展することを示唆している。

さらに、松井 (1990) は、大学生の恋愛行動が「開示行動」、「共行動」、「性行動」、「葛藤行動」の4種類に分けられ、これら4種類の行動が、恋愛関係の進展に伴い、5つの段階に分けられ、出現することを明らかにしている。具体的には、第1段階では、「開示行動」の「友愛的会話」（「友人や勉強の話」など）や「内面の開示」（「悩みを打ち明ける」など）、「つながりを求める行動」（「寂しいとき、話を聞いてもらう」）、「共行動」の「協力」（「仕事や勉強を手伝う」）や「プレゼント」、「性行動」の「肩や身体に触れる」などがみられる。第2段階では、「開示行動」の「用もないのに電話」や「用もないのに会う」、「共行動」の「デート」や「一緒に買い物」、「性行動」の「手や腕を組む」、「葛藤行動」の「口げんか」などが生じる。第3段階では、「開示行動」の「ボーイ/ガールフレンドとして友人に紹介」や「共行動」の「部屋を訪問」、「性行動」の「キス・抱きあう」、「葛藤行動」の「別れたいと思った」がみられる。第4段階では、「開示行動」の「恋人として友人に紹介」が生じ、第5段階では、「結婚の話」や「求婚」、「結婚の約束」のような求婚行動や、「性行動」の「ペッティング」や「性交」、「葛藤行動」の「殴った/殴られた」などがみられるようになる。この結果から、恋愛関係で生じる行動は、恋人以外の関係でも行われるような行動から恋愛関係のみで行われる行動へ進展し、さらに結婚に向かう行動に至るというように、一次的に進展していくが、その過程で生じる葛藤行動は、恋愛関係の解消・崩壊に向かわせることが示唆されている。

恋愛行動の進展の一次元性について、松井 (1993a) では、91%の大学生がこの段階に沿って恋愛を行っていたことが明らかにされている。また、松井 (2000) は、松井 (1990) と同様のデータを収集し、松井 (1990) と類似した恋愛行動の進展の一次元性が再現されていることから、松井 (1990) の恋愛関係の進展に関する5段階説は、ある程度頑健であることが推測される。

一方、松井 (1990) に比べ、松井 (2000) では、「友人や勉強の話をする」や「プレゼントを贈ったり贈られたりする」などの行動経験率が減少している。また、「性交」や「ペッティング」のような「性行動」の行動経験率が増加し、第5段階から第4段階へとより早い段階に移行していることも、明らかにされている。しかし、「早い段階に移行した」とし

でも、そもそも松井 (1990) において、「性交」や「ペッティング」はどのくらいの期間で行われる行動であり、それが松井 (2000) において、どのくらい短縮されたのかというような、交際期間との関連は明らかにされていない。松井 (1993b) も、恋愛行動の進展が同じであっても、誰もが同じ時間をかけているわけではなく、第1段階から第5段階まで数週間で済ませる者もいれば、第1段階から第2段階に進展するまでに数年かける者もいると述べている。木原 (2006) では、18~24歳の者のうち、男性62.7%、女性51.0%が、交際開始から1ヶ月以内にセックスをしていることが明らかにされている。このことは、青年の半数以上が、松井 (2000) の第1段階から第4段階までを、1ヶ月程度で進行していることを示唆している。また、Huston, Surra, Fitzgerald, & Cate (1981) は、交際の進展の速さにはカップル差があり、結婚が確定するまでの速さをもとに、カップルを、①急進—減速型交際、②急進型交際、③中間型交際、④長期型交際の4タイプに分類している。Huston et al. (1981) の調査では、①急進—減速型交際や②急進型交際が、交際10ヶ月以内に結婚の可能性を確実視しているのに対し、④長期型交際では、交際30ヶ月を過ぎなければ、結婚の可能性を確実視できていないことが明らかにされている。

このように、恋愛行動の進展には、個人差・カップル差があることは明らかであるが、一方で、一般的・平均的な進展ペースを把握することは、青年が自身の恋愛関係を省みる上で有益な情報であると考えられる。そこで、本研究では、恋人がいる青年に対する3時点の縦断調査を実施し、恋愛行動の進展ペースについて明らかにすることを目的とする。

なお、本研究における“恋人”とは、高坂 (2011) に準じて、回答者が恋人であると思う実際に存在し、接触・交流できる異性とし、片想いや、同性の恋人、芸能人・有名人、アニメやゲームのキャラクターなどは、“恋人”の範囲に含めなかった。

## 2—方法

### 調査概要と分析対象者

本研究で用いるデータは、大学生を対象とした全3回の縦断調査「大学生の恋愛関係と自我発達に関する縦断調査」で得られたデータの一部である。第1回調査 (Time 1) は、2010年5月下旬から6月下旬に北海道・関東・東海・中部・四国の4年制で男女共学の14大学に通う1350名を対象に調査を実施した。この調査において、「恋人がいる」と回答した485名に縦断調査への協力を求め、318名が調査協力に同意した。

第2回調査 (Time 2) は、2010年9月下旬から10月下旬に縦断調査への協力を同意した318名を対象に郵送で実施し、226名から返送が得られた (回収率71.1%)。

第3回調査 (Time 3) は2011年1月下旬から2月下旬に実施した。第2回調査に対し返送をし、第3回調査への協力を同意した220名を対象に郵送で実施し、193名から返送が得られた (回収率87.7%)。

本研究では、3回の調査すべてに回答し、第1回調査の時点での恋人と第3回調査の時

点まで交際が継続していた126名（男子38名、女子88名；平均年齢19.8歳、標準偏差1.2歳）を分析対象者とした。調査対象者のTime 1の時点での平均交際期間は13.3ヶ月（標準偏差12.7ヶ月）であり、レンジは1ヶ月から74ヶ月であった。

### 調査内容・実施手続き

松井（2000）や飛田（1991）を参考に、恋愛行動に関する項目を26項目作成した。「次の項目にある行動を、現在の恋人とつきあう中で、経験したことはありますか」という教示のもと、経験がある場合には、チェック（✓）をつける形式で回答を求めた。

なお、第2回調査時点および第3回調査時点での経験は、各調査で回答を求めたが、第1回調査時点での経験については、第2回調査の際に、第1回調査時点を想起する形で回答を求めた。また、本調査では、恋愛行動に関する項目以外の尺度・項目についても回答を求めているが、これらについては本稿では触れないこととする。

## 3——結果と考察

### 対象者全体の恋愛行動の進展

まず全体的な傾向を把握するため、恋愛行動項目26項目すべてのTime 1からTime 3までの経験率を算出した（図1、表1）。その結果、Time 1において、「開示行動」では、「友人の話をした」（94.4%）と最も多く、「子どもの頃の話をした」（87.1%）、「相談した」（84.7%）、「さびしい時に電話した」（84.7%）、「個人的な悩みを話した」（81.5%）の3項目が80%台を示し、「恋人として友人に紹介した」（79.0%）、「用もないのに電話した」（78.2%）の2項目が70%台を示し、「将来について話をした」（68.5%）、「恋人として親に紹介した」（48.4%）と続いていた。

「共行動」では、「デートをした」（96.8%）、「買い物に行った」（92.7%）の2項目が90%台を示し、「プレゼントを贈った/贈られた」も85.5%と高い経験率を示した。一方、「仕事や勉強の手伝いをした」（54.8%）や「一泊以上の旅行をした」（43.5%）は半数程度しか経験していなかった。

「性的行動」では、「肩をたたいたり、身体に触れたりした」（97.6%）、「手を握ったり、腕を組んだりした」（95.2%）、「キスをした」（91.1%）、「抱き合った」（89.5%）の4項目はいずれも90%前後と高い経験率を示し、「セックスをした」も74.2%が経験していた。

「葛藤行動」では、「口げんか（口論）をした」（60.5%）で最も経験率が高く、「別れたいと思った」（32.3%）、「暴力をふるった/ふるわれた」（10.5%）と続いていた。

「求婚行動」では、「結婚について話をした」（51.6%）が最も経験率が高く、「結婚の約束をした」（21.8%）、「プロポーズをした/された」（15.3%）、「結婚相手として親に紹介した」（3.2%）と続いていた

「開示行動」、「共行動」、「性的行動」、「葛藤行動」、「求婚行動」のいずれにおいても、松

図1 恋愛行動項目の各調査時点での経験率

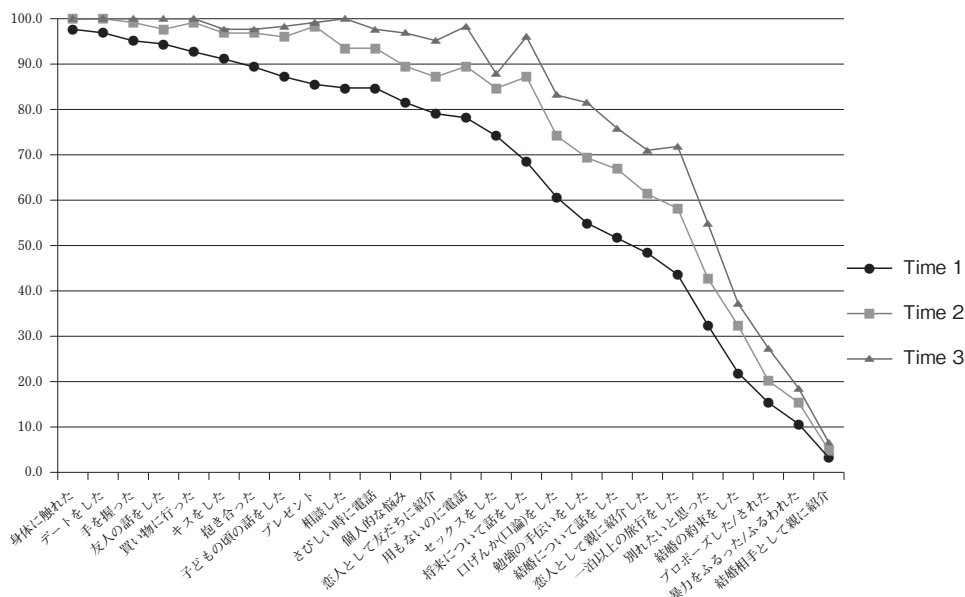


表1 恋愛行動項目の各調査時点での経験率

カテゴリー	項目	Time 1	Time 2	Time 3	Time 1からTime 3までの増加量
性的行動	肩をたいたり、身体に触れたりした	97.6	100.0	100.0	2.4
共行動	デートをした	96.8	100.0	100.0	3.2
性的行動	手を握ったり、腕を組んだりした	95.2	99.2	100.0	4.8
開示行動	友人や勉強の話をした	94.4	97.6	100.0	5.6
共行動	一緒に買い物や映画に行った	92.7	99.2	100.0	7.3
性的行動	キスをした	91.1	96.8	97.6	6.5
性的行動	抱き合った	89.5	96.8	97.6	8.1
開示行動	子どもの頃の話をした	87.1	96.0	98.4	11.3
共行動	プレゼントを贈った/贈られた	85.5	98.4	99.2	13.7
開示行動	相談した	84.7	93.5	100.0	15.3
開示行動	さびしい時に電話やメールをした	84.7	93.5	97.6	12.9
開示行動	個人的な悩みを打ち明けた	81.5	89.5	96.8	15.3
開示行動	恋人として友だちに紹介した	79.0	87.1	95.2	16.2
開示行動	用もないのに電話やメールをした	78.2	89.5	98.4	20.2
性的行動	セックスをした	74.2	84.7	87.9	13.7
開示行動	お互いの将来について話をした	68.5	87.1	96.0	27.5
葛藤行動	口げんか(口論)をした	60.5	74.2	83.1	22.6
共行動	仕事や勉強の手伝いをした	54.8	69.4	81.5	26.7
求婚行動	自分たちの結婚について話をした	51.6	66.9	75.8	24.2
開示行動	恋人として親に紹介した	48.4	61.3	71.0	22.6
共行動	一泊以上の旅行をした	43.5	58.1	71.8	28.3
葛藤行動	別れたいと思った	32.3	42.7	54.8	22.5
求婚行動	結婚の約束をした	21.8	32.3	37.1	15.3
求婚行動	プロポーズした/された	15.3	20.2	27.4	12.1
葛藤行動	暴力をふるった/ふるわれた	10.5	15.3	18.5	8.0
求婚行動	結婚相手として親に紹介した	3.2	4.8	6.5	3.3



井 (1990, 2000) とほぼ一致する結果が得られ、改めて松井 (1990, 2000) の恋愛行動の進展の一次元性の頑健さが確認されたと考えられる。ただし、「共行動」の「仕事や勉強の手伝いをした」は、松井 (1990, 2000) では、第1段階の恋愛行動として位置づけられているが、本研究では、第4段階の行動である「セックスをした」よりも経験率が低かった。本研究の調査時期は、松井 (2000) の10年後に行われており、その間に、恋愛行動の一次元性は維持されつつも、「仕事や勉強の手伝いをした」のような特定の行動において、経験が早まる、あるいは遅くなるという変化が生じたと考えられるが、このような変化が何によって生じたのかは、さらなる詳細な検討が必要である。

次に、Time 1 から Time 3 までの約6ヶ月間に、各恋愛行動の経験率の増加量を算出したところ、「肩をたたいたり、身体に触れたりした」(2.4%)、「デートをした」(3.2%)、「手を握ったり、腕を組んだりした」(4.8%)、「友人の話をした」(5.6%)、「買い物に行った」(7.3%)、「キスをした」(6.5%)、「抱き合った」(8.1%)、「暴力をふるった/ふるわれた」(8.0%)、「結婚相手として親に紹介した」(3.3%)の9項目は、増加量が10%以下であった。このうち、前者7項目はTime 1の時点で90%程度の経験率であったため、10%以上の増加量は生じない行動である。一方、「暴力をふるった/ふるわれた」は、デートDVの一形態であると考えられる。長・小堀 (2013) は、大学生における恋人からの身体的暴力の被害経験率は10%程度であることを示しており、Time 1 から約6ヶ月が経過したとしても、経験率がそれほど増加していないのは妥当な結果であると考えられる。また、「結婚相手として親に紹介する」は、「求婚行動」のなかでも最終的な行動であると考えられ、大学生が行う恋愛行動を超えた行動であると考えられるため、増加量が抑えられたと推察される。

一方、「用もないのに電話をした」(20.2%)、「将来について話をした」(27.5%)、「口げんか(口論)をした」(22.6%)、「仕事や勉強の手伝いをした」(26.7%)、「結婚についての話をした」(24.2%)、「恋人として親に紹介した」(22.6%)、「一泊以上の旅行をした」(28.3%)、「別れたいと思った」(22.5%)の8項目は、20%以上の増加量を示していた。約6ヶ月の間で急増するこれらの恋愛行動が、恋愛関係の深まりや親密化を把握する指標になる可能性が考えられる。しかし、「口げんか(口論)をした」や「別れたいと思った」という「葛藤行動」も含まれていることから、深まりや親密化を示す恋愛行動が増加する過程において、葛藤行動も同時に生じており、その結果、恋愛関係が終了・崩壊することもあり得ると推測される。

### 交際期間ごとの恋愛行動の進展

松井 (2000) や木原 (2006) の指摘から、恋愛行動は交際期間が短い間は急速に進展し、多くの行動を経験すると考えられる。一方、交際期間が長くなると、すでにほとんどの恋愛行動を経験しているため、恋愛行動の顕著な進展はみられないと推測される。そこで、交際期間をもとに対象者を分け、各群での恋愛行動の進展を明らかにする。

各群の人数が同程度になるように、Time 1の時点での交際期間をもとに、交際期間1~4

ヶ月 (交際初期群: 男子 8 名、女子 23 名; 全体の 25.2%)、5~10 ヶ月 (交際短期群: 男子 8 名、女子 26 名; 27.6%)、11~19 ヶ月 (交際中期群: 男子 10 名、女子 18 名; 22.8%)、20 ヶ月以上 (交際長期群: 男子 9 名、女子 21 名; 24.4%) の 4 群に分け、各群の恋愛行動の進展を検討することとする。

**交際初期群の者の恋愛行動の進展** 交際初期群の恋愛行動項目 26 項目すべての Time 1 から Time 3 までの経験率を算出した (表 2)。Time 1 では 26 項目中、経験率 90%以上が 4 項目、70%・80%台が 6 項目、60%台が 3 項目みられた。松井 (2000) において第 4 段階とされる「恋人として友だちに紹介した」は Time 1 の時点で 64.5%、「セックスをした」は 58.1%であり、半数以上の者が、交際 1~4 ヶ月以内で第 4 段階の恋愛行動を行っていることが明らかとなった。一方、松井 (1990, 2000) では第 1 段階に位置づけられている「仕事や勉強の手伝いをした」の経験率は 54.8%であり、「セックスをした」と同程度であった。また、5 段階に位置づけられる「求婚行動」では、「自分たちの結婚についての話をした」(16.1%) が最も経験率が高く、それ以外は 10%以下であり、ほとんど経験されていなかった。

次に、Time 1 から Time 3 までの約 6 ヶ月間に、各恋愛行動の経験率の増加量を算出した

表2 交際初期群の各時点での恋愛行動経験率

カテゴリー	項目	Time 1	Time 2	Time 3	Time 1 から Time 3 までの増加量
性的行動	肩をたいたり、身体に触れたりした	100.0	100.0	100.0	0.0
共行動	デートをした	100.0	100.0	100.0	0.0
性的行動	手を握ったり、腕を組んだりした	90.3	96.8	100.0	9.7
開示行動	友人や勉強の話をした	96.8	100.0	100.0	3.2
共行動	一緒に買い物や映画に行った	83.9	100.0	100.0	14.1
性的行動	キスをした	80.6	93.5	96.8	16.2
性的行動	抱き合った	74.2	93.5	96.8	22.6
開示行動	子どもの頃の話をした	77.4	100.0	100.0	22.6
共行動	プレゼントを贈った/贈られた	67.7	100.0	100.0	32.3
開示行動	相談した	74.2	96.8	100.0	25.8
開示行動	さびしい時に電話やメールをした	67.7	87.1	96.8	29.1
開示行動	個人的な悩みを打ち明けた	58.1	80.6	90.3	32.2
開示行動	恋人として友だちに紹介した	64.5	83.9	96.8	32.3
開示行動	用もないのに電話やメールをした	71.0	87.1	100.0	29.0
性的行動	セックスをした	58.1	80.6	83.9	25.8
開示行動	お互いの将来について話をした	41.9	77.4	90.3	48.4
葛藤行動	口げんか(口論)をした	48.4	74.2	87.1	38.7
共行動	仕事や勉強の手伝いをした	54.8	77.4	83.9	29.1
求婚行動	自分たちの結婚について話をした	16.1	45.2	61.3	45.2
開示行動	恋人として親に紹介した	22.6	51.6	71.0	48.4
共行動	一泊以上の旅行をした	9.7	41.9	54.8	45.1
葛藤行動	別れたいと思った	12.9	25.8	38.7	25.8
求婚行動	結婚の約束をした	6.5	25.8	29.0	22.5
求婚行動	プロポーズした/された	6.5	16.1	19.4	12.9
葛藤行動	暴力をふるった/ふるわれた	6.5	12.9	16.1	9.6
求婚行動	結婚相手として親に紹介した	0.0	0.0	3.2	3.2

ところ、「お互いの将来について話をした」(48.4%)、「自分たちの結婚について話をした」(45.2%)、「恋人として親に紹介した」(48.4%)、「一泊以上の旅行をした」(45.1%)の4項目が45%以上の増加量を示した。また、「プレゼントを贈った/贈られた」(32.3%)、「個人的な悩みを打ち明けた」(32.2%)、「恋人として友人に紹介した」(32.3%)、「口げんか(口論)をした」(38.7%)の4項目が30%以上の増加量を示した。

Time 1の時点で交際期間が1~4ヶ月であるということは、Time 3の時点で交際期間は7~10ヶ月になっている。1年に満たない期間のうちに、26項目中21項目が経験率50%を超え、松井(2000)で第3段階や第4段階に位置づけられている行動が、Time 1からTime 3の間に30%以上の増加量を示していることから、この期間に、恋愛関係が急速に進展し、一泊以上の旅行をしたり、友人や親に恋人として紹介することで、お互いが恋人であるという確信を得ているのではないかと推察される。

交際短期群の恋愛行動の進展 交際短期群の恋愛行動項目26項目すべてのTime 1からTime 3までの経験率を算出した(表3)。26項目中16項目が、Time 1の時点で経験率70%を越えており、交際初期群ではTime 1の時点で20%前後の経験率であった「自分たちの結

表3 交際短期群の各時点での恋愛行動経験率

カテゴリー	項目	Time 1	Time 2	Time 3	Time 1からTime 3までの増加量
性的行動	肩をたたいたり、身体に触れたりした	91.2	100.0	100.0	8.8
共行動	デートをした	91.2	100.0	100.0	8.8
性的行動	手を握ったり、腕を組んだりした	91.2	100.0	100.0	8.8
開示行動	友人や勉強の話をした	88.2	97.1	100.0	11.8
共行動	一緒に買い物や映画に行った	91.2	100.0	100.0	8.8
性的行動	キスをした	88.2	94.1	94.1	11.8
性的行動	抱き合った	88.2	94.1	94.1	5.9
開示行動	子どもの頃の話をした	85.3	97.1	100.0	14.7
共行動	プレゼントを贈った/贈られた	85.3	97.1	100.0	14.7
開示行動	相談した	85.3	97.1	100.0	14.7
開示行動	さびしい時に電話やメールをした	82.4	97.1	100.0	17.6
開示行動	個人的な悩みを打ち明けた	82.4	91.2	97.1	14.7
開示行動	恋人として友だちに紹介した	79.4	88.2	94.1	14.7
開示行動	用もないのに電話やメールをした	79.4	97.1	100.0	20.6
性的行動	セックスをした	73.5	85.3	88.2	14.7
開示行動	お互いの将来について話をした	76.5	91.2	100.0	23.5
葛藤行動	口げんか(口論)をした	44.1	61.8	73.5	29.4
共行動	仕事や勉強の手伝いをした	41.2	58.8	73.5	32.3
求婚行動	自分たちの結婚について話をした	50.0	64.7	76.5	26.5
開示行動	恋人として親に紹介した	50.0	55.9	61.8	11.8
共行動	一泊以上の旅行をした	47.1	64.7	76.5	29.4
葛藤行動	別れたいと思った	20.6	29.4	44.1	23.5
求婚行動	結婚の約束をした	23.5	32.4	35.3	11.8
求婚行動	プロポーズした/された	11.8	14.7	26.5	14.7
葛藤行動	暴力をふるった/ふるわれた	5.9	11.8	11.8	5.9
求婚行動	結婚相手として親に紹介した	0.0	0.0	2.9	2.9



婚について話をした」や「恋人として親に紹介した」が、ともに 50.0%となっていた。

Time 1 から Time 3 までの増加量をみると、交際初期群のように 40%以上の増加量を示した項目はみられず、「口げんか (口論) をした」(29.4%)、「仕事や勉強の手伝いをした」(32.3%)、「一泊以上の旅行をした」(29.4%) の 3 項目が、30%前後の増加量を示した。これらの項目は、交際初期群でも増加量が多かった項目であり、交際が 11 ヶ月から 16 ヶ月と長くなるにつれ、仕事や勉強の手伝いや一泊以上の旅行のように、恋人との関係がより親密になることを意味する行動が増える一方、口げんか (口論) も増えることから、恋人と親密になるがゆえに生じる葛藤や恋人との距離の取り方などの問題が生じてくると推測される。

交際中期群の恋愛行動の進展 交際中期群の恋愛行動項目 26 項目すべての Time 1 から Time 3 までの経験率を算出した (表 4)。Time 1 の時点で経験率が 70%を越えた項目は、26 項目中 17 項目であり、交際短期群と大きな違いはみられなかった。一方、「口げんか (口論) をした」は交際短期群の Time 1 時点で 44.1%であったが、交際中期群は 75.0%になっており、「仕事や勉強の手伝いをした」は交際短期群で 41.2%であったが、交際中期群では

表4 交際中期群の各時点での恋愛行動経験率

カテゴリー	項目	Time 1	Time 2	Time 3	Time 1からTime 3 までの増加量
性的行動	肩をたいたり、身体に触れたりした	100.0	100.0	100.0	0.0
共行動	デートをした	96.4	100.0	100.0	3.6
性的行動	手を握ったり、腕を組んだりした	100.0	100.0	100.0	0.0
開示行動	友人や勉強の話をした	100.0	100.0	100.0	0.0
共行動	一緒に買い物や映画に行った	100.0	100.0	100.0	0.0
性的行動	キスをした	96.4	100.0	100.0	3.6
性的行動	抱き合った	96.4	100.0	100.0	3.6
開示行動	子どもの頃の話をした	96.4	96.4	96.4	0.0
共行動	プレゼントを贈った/贈られた	92.9	100.0	100.0	7.1
開示行動	相談した	92.9	92.9	100.0	7.1
開示行動	さびしい時に電話やメールをした	96.4	96.4	96.4	0.0
開示行動	個人的な悩みを打ち明けた	92.9	92.9	100.0	7.1
開示行動	恋人として友だちに紹介した	78.6	82.1	92.9	14.3
開示行動	用もないのに電話やメールをした	78.6	89.3	96.4	17.8
性的行動	セックスをした	85.7	89.3	92.9	7.2
開示行動	お互いの将来について話をした	78.6	92.9	100.0	21.4
葛藤行動	口げんか(口論)をした	75.0	82.1	85.7	10.7
共行動	仕事や勉強の手伝いをした	64.3	75.0	82.1	17.8
求婚行動	自分たちの結婚について話をした	64.3	75.0	82.1	17.8
開示行動	恋人として親に紹介した	46.4	64.3	71.4	25.0
共行動	一泊以上の旅行をした	50.0	53.6	71.4	21.4
葛藤行動	別れたいと思った	46.4	64.3	71.4	25.0
求婚行動	結婚の約束をした	28.6	35.7	46.4	17.8
求婚行動	プロポーズした/された	17.9	25.0	35.7	17.8
葛藤行動	暴力をふるった/ふるわれた	14.3	21.4	28.6	14.3
求婚行動	結婚相手として親に紹介した	3.6	7.1	7.1	3.5

64.3%に、「自分たちの結婚について話をした」は交際短期群が50.0%であったが、交際中期群は64.3%に、「別れたいと思った」は交際短期群が20.6%であったが、交際中期群は46.4%になっていた。交際期間が長くなっても、「自分たちの結婚について話をした」以外の求婚行動は増えておらず、仕事や勉強の手伝いや結婚の話、口げんか（口論）や別れたいという思いなど、親密さを表す行動とそれに伴う葛藤行動を経験する割合が増加することが示された。

Time 1 から Time 3 までの増加量をみても、交際初期群や交際短期群のような40%台や30%台の増加はみられず、「恋人として親に紹介した」と「別れたいと思った」が25.0%の増加量を示したのが最大であった。交際期間が1年半から2年と長くなっても、松井(1990, 2000)の第4段階までの恋愛行動の経験率が増加するだけで、求婚行動のような第5段階の恋愛行動には至らないことが明らかとなった。

交際長期群の恋愛行動の進展 交際長期群の恋愛行動項目26項目すべてのTime 1 からTime 3 までの経験率を算出した(表5)。Time 1 の時点で経験率が70%を越えた項目は、26項目中19項目であり、交際短期群(16項目)や交際中期群(17項目)と大きな違いはみら

表5 交際長期群の各時点での恋愛行動経験率

カテゴリー	項目	Time 1	Time 2	Time 3	Time 1からTime 3 までの増加量
性的行動	肩をたたいたり、身体に触れたりした	100.0	100.0	100.0	0.0
共行動	デートをした	100.0	100.0	100.0	0.0
性的行動	手を握ったり、腕を組んだりした	100.0	100.0	100.0	0.0
開示行動	友人や勉強の話をした	96.7	96.7	100.0	3.3
共行動	一緒に買い物や映画に行った	96.7	96.7	100.0	3.3
性的行動	キスをした	100.0	100.0	100.0	0.0
性的行動	抱き合った	100.0	100.0	100.0	0.0
開示行動	子どもの頃の話をした	93.3	93.3	96.7	3.4
共行動	プレゼントを贈った/贈られた	96.7	96.7	96.7	0.0
開示行動	相談した	86.7	93.3	100.0	13.3
開示行動	さびしい時に電話やメールをした	96.7	96.7	96.7	0.0
開示行動	個人的な悩みを打ち明けた	93.3	93.3	100.0	6.7
開示行動	恋人として友だちに紹介した	93.3	93.3	96.7	3.4
開示行動	用もないのに電話やメールをした	86.7	86.7	96.7	10.0
性的行動	セックスをした	83.3	86.7	90.0	6.7
開示行動	お互いの将来について話をした	76.7	86.7	93.3	16.6
葛藤行動	口げんか(口論)をした	80.0	83.3	90.0	10.0
共行動	仕事や勉強の手伝いをした	60.0	66.7	86.7	26.7
求婚行動	自分たちの結婚について話をした	80.0	86.7	86.7	6.7
開示行動	恋人として親に紹介した	73.3	73.3	80.0	6.7
共行動	一泊以上の旅行をした	66.7	70.0	83.3	16.6
葛藤行動	別れたいと思った	53.3	56.7	70.0	16.7
求婚行動	結婚の約束をした	30.0	36.7	40.0	10
求婚行動	プロポーズした/された	23.3	23.3	26.7	3.4
葛藤行動	暴力をふるった/ふるわれた	16.7	16.7	20.0	3.3
求婚行動	結婚相手として親に紹介した	10.0	13.3	13.3	3.3

れなかった。また、交際中期群の Time 1 の時点での各恋愛行動の経験率と、恋愛長期群の Time 1 の時点での各恋愛行動の経験率との間にも大きな差異はみられず、大学生の恋愛関係においては、交際期間が長くなっても、恋愛行動のバリエーションはあまり増加しないことが推察される。

Time 1 から Time 3 までの増加量をみても、交際初期群や交際短期群のような 40% 台や 30% 台の増加はみられず、「仕事や勉強の手伝いをした」(26.7%) の増加量が最大であった。これらから、交際中期群と交際長期群には、恋愛行動の観点からは大きな差異はみられないことが示唆される。これは、経験率が増加する可能性がある項目の多くが「求婚行動」であることから、大学生の恋愛関係では、短期間のうちにほとんどの恋愛行動を行ってしまい、大学卒業まで「求婚行動」だけが残されていることを意味していると考えられる。

#### 4 — 結果のまとめ

本研究では、大学生の恋愛行動の進展について、対象者全体の推移と、交際期間ごと(交際初期群・交際短期群・交際中期群・交際長期群)の恋愛行動の進展について検討してきた。これらの結果を統合したものが表 6 である。表 6 では、ある期間に経験率がおおよそ 90% 以上になると考えられる恋愛行動を S クラス、70~90% になると考えられる恋愛行動を A クラス、50~70% になると考えられる恋愛行動を B クラス、30~50% になると考えられる行動を C クラス、10~30% になると考えられる行動を D クラス、10% 未満であると考えられる行動を E クラスとして配置している。ここから以下の 3 点が指摘できる。(1) 松井(1990, 2000) が第 3 段階までに位置づけている恋愛行動や第 4 段階に位置づけている恋愛行動の多くは、交際 8 ヶ月程度までに A ランク(経験率 70% 以上)以上に位置づけられる、(2) 「一泊以上の旅行をした」、「仕事や勉強の手伝いをした」、「恋人として親に紹介した」、「口げんか(口論)をした」など、両者の親密化とそれに伴う葛藤を意味する行動は、緩やかに増加する、(3) 「求婚行動」は、ほとんど上昇はみられない、という 3 点である。つまり、大学生の恋愛関係では、セックスを含めた多くの恋愛行動は 8 ヶ月程度以内という短期間で経験され、その後、両者が親密さを示す行動を行うようになる一方、それに伴う葛藤も徐々に経験するようになるが、結婚に関わる行動は、大学生である間はほとんど経験されないと考えられる。

松井(1990, 2000)では、恋愛行動の進展の次元性を明らかにしているが、どの程度の交際期間でどの段階まで進展するかは明らかにされていない。本研究では、おおよその交際期間を示すことで、平均的・一般的な進展ペースを明らかにすることができ、それにより、青年が自身の恋愛関係を顧みる際の指標・指針のひとつになると考えられる。

このように恋愛行動の平均的・一般的な進展ペースが明らかになる一方、そのペースよりも極端に早いカップルや遅いカップルも存在する。Huston et al. (1981) は、交際の進展速度によって、カップルを 4 つのタイプに分類している。このような恋愛行動の進展ペー

表 6 交際期間に伴う大学生の恋愛行動の進展

	1～4ヶ月	5～8ヶ月	9～12ヶ月
S (90%以上)	◇肩をたたいたり、身体に触れたりした ◇手を握ったり、腕を組んだりした ◆友人や勉強の話をした ○デートをした	◇肩をたたいたり、身体に触れたりした ◇手を握ったり、腕を組んだりした ◆友人や勉強の話をした ○デートをした <u>○一緒に買い物や映画に行った</u>	◇肩をたたいたり、身体に触れたりした ◇手を握ったり、腕を組んだりした <u>◇キスをした</u> <u>◇抱き合った</u> ◆友人や勉強の話をした ◆子どもの頃の話をした ◆相談した ◆用もないのに電話やメールをした ◆個人的な悩みを打ち明けた ◆お互いの将来について話をした ◆さびしい時に電話やメールをした ○デートをした ○一緒に買い物や映画に行った <u>○プレゼントを贈った/贈られた</u>
A (70～90%)	◇キスをした ◇抱き合った ◆子どもの頃の話をした ◆相談した ◆用もないのに電話やメールをした ○一緒に買い物や映画に行った	◇キスをした ◇抱き合った <u>◇セックスをした</u> ◆子どもの頃の話をした ◆相談した ◆用もないのに電話やメールをした ◆さびしい時に電話やメールをした ◆個人的な悩みを打ち明けた ◆お互いの将来について話をした <u>○プレゼントを贈った/贈られた</u> ◆恋人として友人に紹介した	◇セックスをした ◆恋人として友だちに紹介した
B (50～70%)	◇セックスをした ◆さびしい時に電話やメールをした ◆個人的な悩みを打ち明けた ○仕事や勉強の手伝いをした ○プレゼントを贈った/贈られた ◆恋人として友人に紹介した	○仕事や勉強の手伝いをした ◆恋人として親に紹介した ■自分たちの結婚について話をした ★口げんか(口論)をした	○仕事や勉強の手伝いをした <u>○一泊以上の旅行をした</u> ◆恋人として親に紹介した ■自分たちの結婚について話をした ★口げんか(口論)をした
C (30～50%)	◆お互いの将来について話をした ★口げんか(口論)をした	<u>○一泊以上の旅行をした</u>	★別れたいと思った
D (10～30%)	◆恋人として親に紹介した ■自分たちの結婚について話をした ★別れたいと思った	■結婚の約束をした ■プロポーズをした/された ★別れたいと思った	■結婚の約束をした ■プロポーズをした/された ★暴力をふるった/ふるわれた
E (10%未満)	○一泊以上の旅行をした ■結婚の約束をした ■プロポーズをした/された ■結婚相手として親に紹介した ★暴力をふるった/ふるわれた	■結婚相手として親に紹介した ★暴力をふるった/ふるわれた	■結婚相手として親に紹介した

◇性的行動 ◆開示行動 ○共行動 ★葛藤行動 ■求婚行動

注：交際期間が1区間長くなった際にランクが上昇した恋愛行動には下線を引いた。

13～18ヶ月	19～24ヶ月	25ヶ月以上
◇肩をたたいたり、身体に触れたりした	◇肩をたたいたり、身体に触れたりした	◇肩をたたいたり、身体に触れたりした
◇手を握ったり、腕を組んだりした	◇手を握ったり、腕を組んだりした	◇手を握ったり、腕を組んだりした
◇キスをした	◇キスをした	◇キスをした
◇抱き合った	◇抱き合った	◇抱き合った
◆友人や勉強の話をした	◆友人や勉強の話をした	◇セックスをした
◆子どもの頃の話をした	◆子どもの頃の話をした	◆友人や勉強の話をした
◆相談した	◆相談した	◆子どもの頃の話をした
◆用もないのに電話やメールをした	◆用もないのに電話やメールをした	◆相談した
◆個人的な悩みを打ち明けた	◆個人的な悩みを打ち明けた	◆用もないのに電話やメールをした
◆お互いの将来について話をした	◆お互いの将来について話をした	◆個人的な悩みを打ち明けた
◆さびしい時に電話やメールをした	◆さびしい時に電話やメールをした	◆お互いの将来について話をした
○デートをした	○デートをした	◆さびしい時に電話やメールをした
○一緒に買い物や映画に行った	○一緒に買い物や映画に行った	○デートをした
○プレゼントを贈った/贈られた	○プレゼントを贈った/贈られた	○一緒に買い物や映画に行った
◆恋人として友だちに紹介した	◆恋人として友だちに紹介した	○プレゼントを贈った/贈られた
		◆恋人として友だちに紹介した
		★口げんか(口論)をした
◇セックスをした	◇セックスをした	○仕事や勉強の手伝いをした
○仕事や勉強の手伝いをした	○仕事や勉強の手伝いをした	○一泊以上の旅行をした
★口げんか(口論)をした	◆恋人として親に紹介した	◆恋人として親に紹介した
	■自分たちの結婚について話をした	■自分たちの結婚について話をした
	★口げんか(口論)をした	★別れたいと思った
○一泊以上の旅行をした	○一泊以上の旅行をした	
◆恋人として親に紹介した	★別れたいと思った	
■自分たちの結婚について話をした		
■結婚の約束をした	■結婚の約束をした	■結婚の約束をした
★別れたいと思った		
■プロポーズをした/された	■プロポーズをした/された	■プロポーズをした/された
★暴力をふるった/ふるわれた	★暴力をふるった/ふるわれた	★暴力をふるった/ふるわれた
		■結婚相手として親に紹介した
■結婚相手として親に紹介した	■結婚相手として親に紹介した	



スの差異が、何によって生じているのか、また進展ペースが速いあるいは遅いことが恋愛関係にどのような影響があるのか、など、進展ペースのカップル間の差異の要因や影響について検討する必要があると考えられる。

#### 《引用文献》

- 飛田 操 (1991). 青年期の恋愛行動の進展について 福島大学教育学部論集, 50 (教育・心理部門), 43-53.
- Huston, T. L., Surra, C., Fitzgerald, N., & Cate, R. (1981). *From courtship to marriage: mate selection as an interpersonal process*. In S. Duck & R. Gilmour (eds) *Personal Relationships 2. Developing Personal Relationships*. London: Academic Press Pp. 53-88.
- 木原雅子 (2006). 10代の性行動と日本社会: そしてWYSH教育の視点 ミネルヴァ書房
- 高坂康雅 (2011). “恋人を欲しいと思わない青年”の心理的特徴の検討 青年心理学研究, 23, 147-158.
- 松井 豊 (1990). 青年の恋愛行動の構造 心理学評論, 33, 355-370.
- 松井 豊 (1993a). 恋愛行動の段階と恋愛意識 心理学研究, 64, 335-342.
- 松井 豊 (1993b). セレクション社会心理学 12 恋ごろの科学 サイエンス社
- 松井 豊 (1998). 恋愛に関する実証的研究の動き 現代のエスプリ, 368, 5-19.
- 松井 豊 (2000). 恋愛段階の再検討 日本社会心理学会第41回大会発表論文集, 92-93.
- Swenson, C. H. (1972). *The behavior of love*. In H. A. Otto (ed.) *Love Today: A New Exploration*. New York: Association Press Pp. 87-101.
- 長 香織・小堀尋香 (2013). デートDVの現状と課題: 大学生を対象とした調査から 宇都宮大学教育学部紀要 第1部, 63, 211-219.

付記: 本研究は、日本心理学会第76回大会(2012年)で発表したものを再分析・再構成し、論文化したものである。

謝辞: 本研究の実施にあたり、以下の先生方のご協力をいただきました。ここにご芳名を記し、心より感謝の意を表します(ご芳名はアルファベット順、ご所属は現所属)。

橋本 剛先生(静岡大学) 葉山大地先生(茨城大学大学院) 平石賢二先生(名古屋大学) 伊田勝憲先生(北海道教育大学釧路校) 西山(加賀谷)薫先生(北星学園大学) 大野 久先生(立教大学) 小塩真司先生(早稲田大学) 佐藤有耕先生(筑波大学) 鈴木みゆき先生(関東学院大学) 田島充司先生(東京外語大学) 谷川松芳先生(北翔大学) 戸田弘二先生(北海道教育大学札幌校) 戸田まり先生(北海道教育大学札幌校) 宇井美代子先生(玉川大学) 山谷敬三郎先生(北翔大学) 矢野宏光先生(高知大学)